

# 詩誌 新聞詩 第1号

2023年12月24日詩誌新聞詩倶楽部発行





目次

シャーマン記者

Yの死

どこかにつながっている

狂気と正気の間で

きょうを生き延びるために

音のない世界

ファントム

亡者

ピーピーピー

新聞 新聞 新聞

とんとん節

平安京瓦版第1号

編集後記

奥付

新川 亮

新川 亮

新川 亮

田宮 ケンジロウ

田宮 ケンジロウ

田宮 ケンジロウ

大元無為

大元無為

大元無為

鎌田東二

鎌田東二

鎌田東二

新川亮・田宮ケンジロウ・大元無為・鎌田東二

5

7

9

12

14

17

21

24

26

30

35

38

44

46



## 「ジャーマン記者」 新川 亮

語ることは、象ること、いや形どること、模ること

この世の森羅万象に、限定的なまなごしを向け、それを再現すること  
神話は語る、世界の始まりを、人類の創造を、民の発生を

われ、見たものを語ろう、書こうと

ありのままなど、ないのだと、語ったのは誰だっけか

世界がつくられたものならば、それをつくりなおすことも可能で

柔らかく、ふにゃふにゃで、だけど硬そうで、にぶく動かないように見えてしまう

われ、語ることで、書くことで、世界を変えよう

硬直した筋肉をほぐし、歪んだ骨格を整えるように

正しさが、氾濫しているのだ、多様で、流動的で、可変的で

それでも、意味なくして、この世は固定しないのだから

われ、ジャーマンとなり、メディアとなり、言葉を語ろう

誰かが語った言葉を、既に使い古された言葉を、新しい意味に接続しようとする言葉を、ときに人を傷ます言葉を、つながりのなかで、紡いでいこう

記号は常に過剰で、有限の中で、惑いは増殖するばかり

語ることの暴力であることはそう

しかしそれは祈りにも似て、救済に手を伸ばしている

## 「Yの死」 新川 亮

ある日突然、Yが死んだ。何の前触れもなく、音さえ立てず、誰にも気付かれないように、そっと、息を引き取った。Yの死と直面するまで、ぼくはYの存在を気に留めたこともなかった。それはずっとそこに、ぼくが意識するそのずっと前から、当然のような顔をして、その場所にいた。ところがどうだ。Yの非存在が、Yが存在したことをこんなにぼくに知らしめるなんて。Yがいなくなつて初めて、Yがいたということを知った。それもすごく切実に。Yのいない世界で、ぼくは何もすることができない。Y以外のみなは、居心地の悪そうな表情でぼくを見つめる。「いままでYのことなんてこれっぽっちも考えたことなかったせに」とKが言う。「そうだ、そうだ」とHとMも同調する。「まあ、まあ」とDがなだめてくれるけど、その目は哀れみで満ちている。仕方がない。Yがいない世界で、ぼくは途方に暮れるしかないのだから。Yがいないと、にやとかひゅとかちやとか言えないし、アイラブユーだって歌えない。でも一番ぼくを驚かせた事実は、Yがいないということだ、ぼくがもう何も言えなくなつてしまったことだ。Yなしでも、何かを言おうとすることはできる。でも、Yのいない世界で何かを言うことはとても困難だ。その困難さに、ぼくはなす術がない。いつそもう口を閉じてしまおう。何も考えないのだ。そしたらどうだ、ぼくはポンコツみたいになった。何も言わないということとは、なにもしないということだ。なにもしないということは、ぼくが存在しないも同じ。たかがYなのに。Yがいなくなつて生きていけるのに。だけど、Yのいない世界で、ぼくはもう語れない。語ることできかない世界に、一体どんな意味があるのだろうか。お願いだから、帰つて来ておくれ、ぼくのY。気付いてしまったんだ、ぼくにはきみが必要だつて。Yのささやかな死に、ぼくは相当まいつてしまったようだ。その後、数週間

たつて、修理に出した。パソコンがようやくぼくのもとに返ってきた。キーボードには、元気そうな「Y」の姿が見えた。ぼくは嬉しくて、ワードにHG創英角ポップ体の48サイズで「やった！よかった！やったほー！」と書きつけてやった。

「どこかにつながっている」 新川 亮

都会の喧騒に、青い舌の少女たち

テレビは瓦礫の山に、埋もれる赤ん坊

6歳の娘が、これは私のだから、触るなど叫ぶ

2歳の妹も、やだわたしの、と応戦する

ビートが響く

酩酊して踊る、オーバードーズの錠剤

助けてほしいと笑う

乾いた、からからとした、なんとも芯のない

ミサイルを放ったのはだれ？

病院が崩壊する

サイレンが鳴る

逃げろ、どこから

空は青いのに

6歳が手を差し伸べる

一緒に遊ぼう、気まぐれなこと

2歳はさっきのことが嘘のよう

けたけた笑って、走り寄る

青い舌を見せ合う

苦しいと、淋しいと

ここは、どこかにつながっているのは確かだ



## 「狂氣と正氣の間で」

田宮ケンジロウ

あの娘があいつに抱かれた夜も

通信社のスピーカーは 世界の憎悪を吐き出した

褐色の雑踏で 誇大な正義が小さな体を吹き飛ばし

黒い濁流が 無垢な人々をさらっていき

かの国のサディストが 弱き者たちをなぶり続ける

森羅万象 宇宙の果てまでも くたびれたファクシミリの向こう側

人の死とダウ平均を天秤にかけ 正解のない価値をジャッジする

喜びも涙も憎しみも 全てがブランケットの紙の上

今日もまた 閻魔大王になって悲喜劇を値踏みする

狂氣と正氣をつなぐ言葉はどこにある

無機質な文字に かすかな魂を宿らせんと身をよじる

鎧で身を固めたブン屋たちも 少年の自死に拳を震わせ

フルスイングを貫いた赤い鉄人の訃報に 自分を重ね合わせる

夜更けの戦場に届く 活字と写真のモザイク

インクの匂いと湿った温かさに やっと正気が舞い降りる

タクシーに憂鬱な体を沈ませて 音のない街をひた走る

白々とした黎明の光が くすぶる心に幕を降ろす

ルオーのミセレーレを抱きながら 琥珀色の海に身を投げ出す  
生きる哀しみも 拗ねた心も 底なしの闇に溶けてゆく

小さなアトム少年が舞い降りたあの街で

大企業の毒水が注がれたあの海辺で

鎮魂と怨念の鐘が鳴っている

嵐の夜も 厳寒の朝も 炎天下の夏も

泥水をすすって 這いつくばって

幸せの破片を探している

あの娘が 大切なものを失ったあの日――

「きょうを生き延びるために」

田宮ケンジロウ

土埃でかすむ 海辺の体育館

階下から漂う 生臭いホルマリン

段ボールにぐるまっつて 少女がペンを走らせる

日記ノートを埋め尽くす 日々の配給

号泣するナマズを叱る コミカルなイララスト

生と死があざなう 正気と狂気のデッドライン

なぜ こんな時に なぜ こんな場所で

修羅の刻を止め 彼女はこう言った

「書かないと…、きょうを終われない」

君は僕で 僕は君

あの日、一つの実が 色のない世界に落ちていった

あれから

般若心経を唱えるように

グル、グルと、終わらない感情を殴り続けた

仏像を彫り出すように

ダ、ダ、ダッと、キーボードを叩き続けた

体の震えは 治まっただろうか

鉛色の絶望は 九月の空に吸い込まれただろうか

きょうも どこかで 誰かが

深く 暗い 水の底で叫んでいる

漆黒の間を切り裂く 言葉の種を探しに

悪意に満ちた世界に 透明な虹を架けるために  
答への出ない焦燥を ガシガシと噛み砕くために

永遠の静寂と  
枢を満たす花と  
あなたのために

「音のない世界」 田宮ケンジロウ

大河をのぼる風が円い学び舎を駆け抜けた  
無邪気な童たちが描いた銀河鉄道は  
七十四の瞳をどこへ連れていったのだろう

泥にまみれた廊下に笑い声はなく  
衣紋掛けに張られた木札だけが揺れていた  
心晴、天音、愛香、未空、永遠…  
幸せを願って付けられた名は  
天空への乗車券のためじゃなかったのに

世界中から集まった人形の祈りは  
碧く深く遠い九月の空に吸い込まれ  
校庭に木霊していた歓声は  
裏山のざわめきにかき消され  
つむじ風だけが小さな息遣いを奏でていた

お父さんはね、こう言ったんだ

「今も見えない魔物と闘っているんです」

十年の刻を止め

阿修羅の如く

千聖ちゃん、お父さんの姿は見えるかい

心を閉ざし

憤怒を凍らせ

愛する者の最期の言葉を確かめようと

底のない闇の中で透明な光を探していた

誇り高き二万の魂の揺らめきに目を凝らし

音にならない慟哭を骨の髄で受け止めて

耳をふさぐ者どもに刃を突きつけて

私もまた菩薩にならない修羅の道で



## 「ファントム」 大元無爲

天から亡霊が降ってきた  
銀色の亡霊

その名はファントム  
米軍のジェット戦闘機

のどかな郊外の住宅地  
あつという間に、炎の包まれた  
多くの人が炎に焼かれた

幼子二人は全身にやけどを負った  
兄は「パパ、ママ、バイバイ」とつぶやいた  
弟は「ハトポツポの唄」を口ずさんだ  
そして、二人とも短い生を終えた

その母も全身やけど  
一命はとりとめたものの  
つらい皮膚移植の手術が待っていた

半年数か月頑張ったが、力尽きた

事故の一年後、現場を訪ねた

すでに土地は整備され、新しい家も建っていた

住民の話を聞く

「少し地面を掘ると、まだ金属片が出てくるんですよ」  
爪痕は癒えていなかった

あれから半世紀近く

あの時、亡霊が降ってこなければ

幼子と母は、どんな人生を歩んでいたのだろう

令和のいま、猛禽ミサゴの名をもつ

米軍輸送機の墜落事故がニュースで流れる

国を守ることは大切だ

されど市民を危険にさらすことは許されまい

ましてや命を奪うことは

もう二度と「ハトポツポの唄」は聞きたくない

## 「亡者」 大元無為

亡者

へモウジャンと読む

死んだ人

成仏せずに迷っている靈魂

我利我利亡者、金の亡者といった使い方もする

新聞社では死亡記事を亡者記事と呼ぶ

たとえば、△さん死去の情報が入る

デスクが叫ぶ「△さんの亡者の予定稿あったよな」

同時に情報の確認、関係者の談話取りなどが始まる  
締め切り時間間近だと、編集部は修羅場と化する

ふと、思ったことがある

亡者記事とはあまりよろしくない呼び名ではないか、と  
某社の友人に聞いてみる

「おたくでは、死亡記事のこと、なんて呼んでるの」

「ああ、うちはへシビト」

死人と書いてへシビト」と読ませる

へシニン」と言わないところにひねりがある

そのものずばりの呼び方

亡者のように迷いや我執がない

すっきりしていて、いいかもな

そんなこだわりも、いつしか忘れてしまった

田さんの死亡情報が入ってきた

「亡者の予定稿あったよな」

思わず口をつけて出ってしまった言葉

デスクになっていた私の言葉

どんな偉い人でも亡くなれば亡者扱い

へ亡者とは俺のことかと・・・

いまもデスク編集機の中は、未来の亡者さんで一杯だろう

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

「ピーピーピー」 大元無爲

ピーピーピー

ピーピーピー

食事中でもピーピーピー

電車の中でもピーピーピー

トイレの中でもピーピーピー

デートのさなかもピーピーピー

いつでもどこでもピーピーピー

半世紀近く前

赴任地の支局で渡された

硬質プラスチックの小さな黒い箱

縦二〇センチ、横〇センチ、厚さ一・五センチほど

いつでもどこでも持ち歩く

置き忘れたり落っこしたら大変だ

ピーピーピー

ピーピーピー

さては、事件か、大事故か

近くの公衆電話にまっしぐら

ダイヤル回すは県警記者クラブ

「こっちは呼んでないよ」

お次のダイヤル先は支局のデスク

「早く経費の精算してくれや」

ホッとするやら気が抜けるやら

サツ回りの年季が明けて県庁担当

うれしかったのはピーピーからの解放

ちよっぴり管理の手綱が緩んだ気がした

小さな黒い箱は進化を遂げた

小さな窓に数字や文字がうつる

女子高生のコミュニケーション・アイテム

テレビドラマのタイトルにもなった

その後、手のひらサイズの電話が登場

ピーピーピーは姿を消した

のどかなピーピーピーは遠い昔の話

今や、何でもできる魔法の板の時代

メール、電話、写真や動画

小説、マンガも読めるし、様々な情報も手に入る

老若男女みんな持っている魔法の板

ひとたび、この魔法の板を使ったら、それなしでは生きられぬ

とはいえ、世のなか、どんなことにも表と裏があるものだ

板の裏には闇の世界も広がっている

気をつける、気をつける、要注意、要警戒

小さな小さなへモノリスに



# 「新聞 信聞 神聞」

鎌田東二

## 1 新聞

「新聞」って、

「新しく聞く」って書くんやな。

きょう、はじめて気がついたわ。

なんで、

「新見」、「新しく見る」とちやうのんか？

「聞」、

つまり、「見る」より「聞く」ってことに意味があるのん？

誰かの話を記者さんが「聞き」に行って、それをネタに記事をかくとか。

そういや、「ブンヤ」って俗語もあったな。

これは「新聞屋・シンブンヤ」の略称だというけど、ちょっとコバカにしたところが、いけすかんな。

ようかんがえたら、

「新聞」の「新」って、なんやろ？

「聞」ってなんやろ？

って、かんがえてもたわ。

そやから、いらんこと、いろいろとほじくってしもうた。  
わるいくせや。

## 2, 信聞

「新聞」は、信頼できる「信聞」であるか？

こんなぎようさんのSNSのある時代になってしまたら  
どこに

「信」があるのか、

何が「信聞」できる記事なのなんか、

ようわからんようになってしまった。

こまつたな、ほんまに。

「ぶんや」の記者はんたちも、いろいろといのちがけで

「新しく聞く」ことを書いてはんのやるけど

でも、それを審査も審級もできへん

それをひとりでやれ、ちゅーても、むりやん、そんなこと。

「信聞」にたる記事を見分けることなど、できへんわ。

そんなん、かんたんなことちゃうわ。

わてにはむりや。

あんさんは、どないでっしゃろ？

### 3 「神聞」

むかしむかし、あるところに、へんな「声」が聞こえてくる人がいました。

その人の言うことは、いつも、ちょっと変でした。

ここがおかしいで、これは間違っているで、正しいのはこっちやで。

その人は、その「声」を「神の声」と言いました。

いや、「天の声」やったかいな？

とにかく、その「声」を伝えないかんと、

すごい剣幕で、

ごつごつ迫力で、

語り続け、

みんなに訴えましたが、

だれも、その「声」を聞くとはしませんでした。

その人の名前は、ノアさんやったかな？

オオカミ少年くんやったかな？

ほらふきやったかな？

ともかく、「声」を伝え続けましたが、誰にも届かず、死んでしまいました<sup>(1)</sup>。

注：

(1) そんなことを考えた挙句の果てに、「心聞」や「真聞」も読んでみたいと思う、今日この頃でありました。

「とんとん節(↑)」 鎌田東二

社長は言った

「とんとんでいけ！」

編集局長は言った

「とんとんとんで行こう！」

学芸部長は言った

「とんとんとんとんで撃て！」

デスクは言った

「とんとんとんとんとんですっぱ抜け！」

吾は言う

「とんとんとんまのすっぱ抜け〜。」

どうも威勢があがらんのう。

気合いがはいらんのう。

しみつたれとるのう。

トントントンヤラ トンヤラトン  
トントントンヤラ トンヤラトン

狂いも本気もないのう。

みな、そこそこにおちとるわ。

上にもあがらず、下にもさがらず。

とんとんや。

とんとんとんや。

とんとんとんとんや。

ほなけど、

吾は言う

「とんとんとんまは飛んでくでえ〜。」

どこまで往くか、わからんでえ〜。

やってみなはれ。わからんもんや。

行先不明。行方不明や。

とんとんとんまのとんがら節。

とんとんとんまのとんでも無。

とんとんとんまのとんばら舞。

とんとんとんまのトンネル道。

注

(1) 鎌田東二は、一時期、「かまたとんとん」と呼ばれていた。

## 「平安狂瓦版第1号」 鎌田東二

みなさん 天気は死にました。

ので、比叡山にクマが出没して、人を襲うという被害が出ました。

2023年8月2日のことでした。

市民曰く、「クマくんもかわいそうや。山にドングリやたべもんがのうなつて。あちこち、うろろうさがしまわっとんのや。」

専門家曰く、「地球温暖化により生態系が変化したために、熊を始め動物種の生息状態に変化が見られますので、くれぐれもご注意ください。」

吾は言う。「『狂天慟地』となつて、あらみたまが荒れ狂っているのだ。天岩戸が閉じて、もろもろの災いが起つて来たという『古事記』にある岩戸隠れの再来だ。それが、動植物の行動変化や人心の乱れや社会不安を生み出しているのだ。

とにかく、その被害者を救出したということだ、

東山修験道870回目の登拝中の吾が、新聞テレビの取材を受け、  
京都新聞、毎日放送、関西テレビで報道されたのだった<sup>(1)</sup>。

思いもかけぬ出来事だった。

昔の「平安京」は、今、「不安狂」になっている。

そんな感じが、日増しに増している。

吾は京に住んでいる。

その京にかつて都があった。

「平安京」と言った。

今でも、中京に住む人の中には、

日本の本当の都は、京都・平安京であると思っている人がいる。

ほんまかいな？

今日、その中京を自転車で走りながら思った。

京都をはたして、「平安京」だったのか？

桓武天皇は、延暦13年(794年)に、遷都した。

『日本紀略』に記されている遷都の詔には、

「葛野の大宮の地は、山川麗しく、

四方の国の百姓の参出で来ることも便りにして、  
とある。

のちに、

平安京と呼ばれた葛野の地の山も川も美しく、  
四方から大勢のいろいろな人が集まってくるのにとっても便利  
と言われているのだ。

さらに、『日本後記』には、

「此の国は山河襟帯し自然に城をなす。

此の勝によりて新号を制むべし。

よろしく山背国を改めて山城国と為すべし。  
また子來の民、謳歌の輩、異口同辞に号して平安京と曰ふ」とある。

この国は、山河が「襟」や「帯」のように周りを取り囲み、自然に城の形をなしている。

このうるわしい景勝に因んで、新しい名前を定めるとしよう。

これまでの「山背国」を改めて、「山城国」とする。

また新しいみやこができたことを喜んで集まった人々や、

寿ぎの歌を歌う人々は、みな異口同音に「平安の都」と呼んでいる。

なので、この都を「平安京」と名づける。

この遷都に際して、宮中で開催された宴で「新京樂、平安樂土、万年春」と寿ぎの踏歌が歌われた。

その「平安京」が「不安狂」に変貌しつつある。

そこで、吾は「平安狂瓦版」を出すこととした。

これが第1号。

「不安狂」と化してきたかつての「平安京」の今を報道します。

クマ騒動の詳細は次号で。

乞う、ご期待！

行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。  
色即是空、空即是色の諸行無常なり。

注

(1) 京都新聞 2023年9月3日付け朝刊記事、毎日放送 2023年10月18日放送京都でも『腕や耳が血だらけに』クマ出没増…被害者を救助した人が語った壮絶な状況(MBS ニュース)

<https://www.mbs.jp/news/kansainews/20231024/GE00053192.shtml> 関西テレビ 2023年10月20日  
「news ランナー」放送 <https://youtu.be/K48ITusPyt8>



## 編集後記

新川亮（あらかわ・まこと） 某通信社記者。大学で文化人類学を学び、約半年間、アフリカ・マラウイで呪術医が人々の病いの経験を構築していく実践を研究。記者歴は約10年。言葉が現実をつくり出すという意味では、アフリカの呪術医が行っていることと、マスメディアがやっていることに大きな差はないのではないかと感じる今日この頃。「自由になるために詩を書いている」というある作家の言葉に感化され、最近詩を書き始めた。文章を書くことで、自分たちが生きるこの世界のことをとことん考えてみたいと思っている。

田宮ケンジロウ（たみや・けんじろう） 世の中のことを知るための入り口はさまざまあるが、まずは科学からと大学で物理学を専攻。そして、這いつくばって社会の矛盾と向き合おうと新聞記者になった。マスコミ受験勉強仲間との文集に「仙人になりたい」と書いたら、なぜか仙台人になった。代わりに東日本大震災を機にさまざまな宗家と出会えた。鎌田東二編集・発行人もその一人だ。5年前に詩作を始めた。当時は新米デスク。書かない立場になり、さらに私事も重なりフラストレーションがたまっていた。30年も記者をやると、新聞のメディアとしての得手、不得手を感じるものがたびたびある。新聞では伝えられないものがある、新聞では伝わらない人がいる。そう思ったので、私は記事と詩という二刀流に踏み出した。ある著名な詩人は「詩とは正気を取り戻すために拾う路傍の石のようなもの」と言った。私も詩に救われ、何とか生きている。いつか、誰かのための“石ころ”を残せたらと願っている。

大元無爲(おおもと・むい) 元新聞記者。少年時代から宗教と占いに関心をもつ。心のメカニズムを探求しようとして、大学では心理学を専攻。広く世間を、深く人間を知ることができるのではないかと新聞記者に。長く文化部に籍を置き、主に論壇と宗教を担当。現在は隠居。文化部にいながら、詩とはほぼ無縁だった。今回、鎌田東二編集・発行人に誘われ、「新聞詩」の同人となったが、未熟そのもの。これまでの経験や思いをへ詩もどきの文章で表現できれば、と思っている。

鎌田東二(かまた・とうじ) 17歳の頃、絶対になりたくなかったのが、学校の先生と坊さんだった。何よりも「説教」が嫌이었다から。なりたかったのが、犯罪心理学者の精神科医か、武道家か、詩人か音楽家。後三者は自由で、実力で勝負できると思ったから。そして今、ガン遊詩人の神道ソングライター。夢は叶ったかな？

その当時、ベトナム戦争反対と学生運動(全共闘)最盛期。ふと、新聞社の外地特派員になって戦地に潜り込み、報告記事を書いてみようかという気持ちになった。満州で航空兵だった父親から同期の航空兵がみな特攻隊で死んだと耳にたこができるほど聞かされたせいだと今となってははっきりわかる。そして今、詩誌『新聞詩』編集・発行人。夢は叶ったかな？



出口王仁三郎作 楽焼茶碗

二〇二三年十二月二十四日  
編集・発行 新聞詩倶楽部